青色のぞうり

出雲市立浜山中学校　三年　　打田香南帆

　幼い頃からピンク色のキラキラしたかわいいものより、青色や黒色のシンプルでかっこいいものが好きだった私。服も靴も青色や黒色のものばかりが増えていき、周りからどう思われるかなんて幼い頃は考えてもいませんでした。

　私の通っていた小学校では、夏になると上靴ではなくぞうりを履いていました。ぞうりは、ピンク色と青色の二種類があり、当然のように女の子はピンク色、男の子は青色を履いていました。別に校則で決められていたわけではありません。女の子が青色を履いても、男の子がピンク色を履いても、ルール上では全く問題はなかったのです。

　小学一年生の頃、私がぞうりを買いに行くと、母はサイズを確かめるため、ピンク色のぞうりを持ってきました。しかし、あいかわらずピンク色が好きではなく、一番好きな色が青色だった私は、母に、

「青色がいい。」

とお願いしました。母は驚いたような顔で、

「本当に青色でいいの？」

と何度も私に確認しました。私はなぜ母がそんなにも心配するのか分かりませんでした。ルールではどちらを選んでも良いはずなのに、何がいけないのだろう。そんな疑問が私の中に残っていました。

　青色のぞうりで初登校した朝、皆が私の足元を不思議そうに見つめていました。すると一人の女の子が

「なんで青色なの？」

と聞いてきました。その時の私は、

「青色が好きだから。」

と素直に答えることができていました。その後六年間、何人もの人に同じ質問をされ、気が付きました。女の子が青色のぞうりを履いているのは変なのだと、自分の「好き」が周りにとって「不自然」であるということを。そして、あの時の母は周りと違う物を好む私が嫌な思いをするのではないか、そんな心配をしていたのだと知りました。それから私はピンク色のぞうりにかえることはなかったものの、以前より人目を気にするようになりました。

　中学校入学のため、自転車を買いに行った時も私は青色のヘルメットを選びました。小学一年生の時とは違い、目立ちたがり屋だと思われるのではないか、変だと笑われるのではないか、そんな不安を抱えていました。

　初登校の朝、小学校の頃からの友達が私の青いヘルメットを見て、

「かなほちゃんらしいね。」

と言いました。その瞬間、私の不安は吹き飛びました。私の「好き」を認めてくれた気がしました。もし私が小学生の時、ピンク色のぞうりを選んでいたら、周りは私の「好き」を知

らないままだったでしょう。あの時、自分の「好き」を曲げなかったからこそ、今の「私らしさ」があるのだと、そう思えたのです。そして、今では、
「青色が好きだから。」
と自信を持って答えることができています。

人と違う物が好きなのは恥ずかしいことではありません。むしろ誇るべきその人の個性です。周りと違うことは怖いことかもしれません。しかし、それは当たり前です。『十人十色』という言葉があるように、誰一人として同じ人はいません。それはつまり、人の数だけその人の「好き」があるということです。互いの「好き」を認め合い、表現することが大切なのだと私は思います。自分の「好き」を言えないでいる人、相手の「好き」を否定している人が少しでも減るように、私はこの経験を通して、自分や相手の「好き」を大切にしてほしい、そう皆さんに伝えたいです。

私はこれからも、自分の「好き」に誇りを持って生きていきたいです。そして、私らしいと言ってくれた友達のように、その人の個性を受け入れ、認めてあげられる、そんな人が少しでも世の中に増えていったら、みんなが当たり前のように「好き」を表現し、尊重し合える、そんな優しい社会に一歩近づけるのではないでしょうか。